

# 栗木京子歌集におけるレトリックに関する考察

## ——第五歌集『夏のうしろ』の体言止めを中心に——

草木 美智子

### はじめに

短歌には多様なレトリックが使用される。よく知られているものに、直喩、隠喩、体言止めなどがある。その中でも本稿では体言止めに着目し考察を行いたい。着目する理由は栗木京子のデビュー作であり、愛唱歌でもある「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」の存在があり、この歌に効果的に使われているのが体言止めとなっているからである。はじめに先に体言止めについて簡潔に記す。体言止めは「何処にか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟」(巻一)など『万葉集』から見られ、平安末期から一層多く用いられるようになり、鎌倉時代のはじめ『新古今和歌集』の頃に最高潮に達した。その代表歌として、「春の夜の夢の浮橋と絶えて峰にわかるる横雲の空」(巻一)がある。体言止めの最大の働きは、述語や述部を省略することから、感覚と想像力とによって象徴性を高め、余情を豊かにすることだ。また歯切れ良いリズム感をもたせたり、終止形で終わる単調さを避ける効果もある。<sup>1)</sup>

例えば、前掲の「観覧車」の歌に即して確認してみると、結句に「一生」と体言止めを用いることで、先に述べたように、感覚と想像力とによって象徴性を高めること、余情を豊かにすること、歯切れ良いリズム感を持たせることができる歌となっている。したがって「一生」で終わる体言止めの手法は重要な役割を果たしていると言えるだろう。次に、体言止めを用いることで、歌の解釈も多様と なっていることも指摘したい。この歌は栗木が二十歳の時に詠んだ恋の歌として知られている。だが、解釈は読者各自に委ねられている。その点について栗木は、次のように述べている。

切実な慕情を詠んだ歌と解釈してくれる人もいるので、作者が歌の背景をあれこれ説明して読者のイメージを壊すのはまことに気が引けるのだが、実際はこの歌は深刻な恋の場面から生まれたものではない。大学二年生のとき、理学部の自主ゼミの間(男女あわせて十人ほど)と大阪の枚方パークに遊びに行っていた。そのときにごく何気なく、するりと心に浮かんだ一首である。(中略)

観覧車の歌が知られるきっかけになったのは、昭和五十四年に『昭和万葉集』（講談社）が刊行されたとき、本の宣伝広告に大きく取り上げてもらったことである。（中略）

『昭和万葉集』には戦中戦後の生死を賭けた恋の歌が多く収められている。その広告に使われた一首なので、自然に「君には一日我には一生」にドラマチックな色合いが添えられることになったようである。<sup>2)</sup>

雑誌のインタビューでは、「戦争未亡人の歌ではありませんかって言われたことはありません。たとえば入営する三日間だけ夫婦生活をして、それで御主人が死んでしまつて、その後ずっと独身を守つたとかね。なるほどそうも取れるなつて思つたんですけどね。」と述べている。<sup>3)</sup> またその他、『短歌往来』及川隆彦編集長は、男性の立場からの解釈として「男の人にとつてみると、邂逅つてそれがたまたま観覧車であるにせよ、男性の方がむしろ一生で、というイメージしか僕にはない。全く別の読み方をして性の歌だとする、そうすると、〈君には一日〉で〈我には一生〉というのは分かるけど。」と述べている。<sup>4)</sup> 以上のことから、確かに短歌の解釈は読者に委ねられていると言えよう。だが、女性の作者が詠んだ歌にも関わらず、性別の議論が起る歌はやはり珍しいのではないだろうか。それはこの歌が先に述べた体言止めの効果、働きを十分に果たしているからといえるのではないか。「一生」という体言止めを使用することで、読者の感覚と想像力とによつて「多様性」と「永遠性」という象徴を高めることができた秀歌の一例であると言えよう。以

上のように、栗木は作品において体言止めという重要な手法を使うことで、自らの作品を高めてきたと言えるのではないだろうか。そこで本稿では、栗木作品におけるレトリックの一つである体言止めに着目し、第五歌集『夏のうしろ』を中心に丁寧に考察していくこととする。尚、本稿に引用する作品に付した傍線はすべて引用者による。

## 一、体言止めにみる「夜」と「白」

栗木の第五歌集『夏のうしろ』は、栗木短歌の特質である「社会詠」が圧倒的に目立ち、栗木の評価を高めた一冊である。体言止めは、四五〇首のうち七三首（一六、二％）に用いられており、社会詠の作品に重要な役割を果たしている。そうした作品を歌集から取り上げ考察を加えてみたい。

はじめに、体言止めが使われている歌を調査していくと注目されるのが「夜」「白」である。まず「夜」を象徴する体言止めの歌を次に挙げたい。これには夕暮れや宵などの表現も含むことも付け加える。傍線は体言止めと「夜」「白」を表現するものである。以下、引用短歌の下に付したページは『夏のうしろ』のページを示す。

カタ、ピシと自転車鳴らし夕暮れの森へと入るは前世のわが夫

(二〇頁)

あかあかと沈む夕日よ円周率「3」で計算する子らの秋

(二二頁)

てのひらを人にあづけてわが未来告げられてをり宵の街角

(二一九頁)

包まれて値をつけられて買はれゆく花になりたし夏至のゆふぐれ

(三三三頁)

木蓮の白き花びらひらききり護符現はるることきゆふぐれ

(三三六頁)

白百合の平熱は二十度ほどならむ雨の匂ひの風吹くゆふべ

(三三六頁)

葉桜となりたる木下木下には老い人佇ちてゐるやうな宵

(四六頁)

わが骨盤見る日はつひになからむを庭に真白く暮れのこる椅子

(四八頁)

名月がうすく汗ばむ夜に読めり仕返しやめぬうさぎのこころ

(六六頁)

カチカチ山

河野裕子歌集『歩く』を読む

蓋に猫のせて入浴する人の可愛さよ今日は豆名月の夜

(七二頁)

柿むけばナイフも指もよこれたりワグナー聴きてひとり過ごす夜

(七八頁)

この街の坂といふ坂一箇所にあつまりて見ゆ夕映のとき

(九九頁)

背と脚をもつゆゑ怖し夕暮れをしづかに燃えてゆく椅子ひとつ

(二二二頁)

とりどりの面売る店の前を過ぎいよよつやめく夜桜の白

(二二二頁)

いつもいつも尿意こらへてあたる子でありし気がする七夕は雨

(二二七頁)

梅雨の夜の料理番組見てをりぬ四人分なる食物の量

(二二八頁)

汗まみれの夕日が森に沈む夏 負け戦負けつづけて死者たち

(二二九頁)

手の先の影つまみあるごとく見ゆをみなばかりの盆踊りの輪

(二二七頁)

ひいやりと人間の言葉をのせて咲くやうで気疎し夜の白萩

(二四〇頁)

豊かさのシンボルとして眼鏡ある国をおもへり夕雲のむかう

(二四九頁)

以上二〇首(二七、四%)が「夜」を象徴とする体言止めの歌と  
なっている。特に着目したいのが次の三首である。

包まれて値をつけられて買はれゆく花になりたし夏至のゆふぐれ

(三三三頁)

木蓮の白き花びらひらききり護符現はるることきゆふぐれ

(三三六頁)

白百合の平熱は二十度ほどならむ雨の匂ひの風吹くゆふべ

(三三六頁)

これら三首の結句は「ゆふぐれ」「ゆふべ」で、体言止めとなっている。三首に詠まれている季節は、春から初夏であろう。冬が終わり明るい春、夏という季節にあえて「夜」「闇」をイメージさせる言葉を使う点に注目したい。この三首には、春や夏のイメージに共通する明るさや陽気さは感じられない。これは本歌集『夏のうしろ』という題名とも関係があると言えるだろう。そのことについては、栗木が本歌集のあとがきで、「歌集名の『夏のうしろ』は、文字通り夏という季節のうしろであると同時に、青春のうしろ、繁栄のうしろ、戦いのうしろ、二十世紀のうしろでもあります。一つの現象が終わったあと、その次にやってくる新しさにすぐに目を向けがちですが、新しさを追う前に今しばし立ちどまって「うしろ」を丁寧に見つめてみることも大切なのではなからうか。そんな思いを込めて歌集名としました。」と述べている。<sup>5)</sup>このように体言止めの「ゆふぐれ」と「ゆふべ」と一首の内容が見事に合致している。また、二首目の歌では「木蓮の白き花びら」、三首目では「白百合」と「白」という色彩を豊かに表現している。特に三首目の上の句では「白百合」と視覚表現を用い、下の句では「雨の匂ひの風吹く」と嗅覚と皮膚感覚に訴える手法を使っている点にも注目したい。そして「ゆふべ」と体言止めの形で終わるのだ。これこそが、読者の視覚、嗅覚に訴え、想像力を豊かにするという体言止めの効果を上手に利用している一首と言えよう。

## 二、社会詠にみる体言止め

本歌集では社会詠が百二〇首(二六、六%)も収められ、注目されている。この関連性も無視できないのではないか。そこで、社会詠の歌を取りあげ考察を加えてみたい。

あかあかと沈む夕日よ円周率「3」で計算する子らの秋

(二二頁)

この歌では「ゆとり教育」<sup>6)</sup>を理学部出身の作者が批判し、また憂いている様子を「沈む夕日」で表現している。だが、この歌は単なる「ゆとり教育」批判の歌とだけ解釈していいのだろうか。即ち、夕日という円を簡素化された円周率「3」で捉えることはできないという文学者の視点と理学部出身者の視点が複雑に混じっている歌ともいえないだろうか。さらに上の句で一日の終わりを表現し、下の句で終わりゆく季節の「秋」という体言止めで終えている歌ともなっている。「夏」という華やかで元気な季節が終わったあとの冬へと続く「秋」を詠む。このように全体で終わりを表現している。この歌も豊かな表現力を持つ体言止めを使うことで、体言止めの有効な効果を得られることができたと言えるだろう。同じく「沈む夏」を表現しているのが次の歌である。

汗まみれの夕日が森に沈む夏 負け戦<sup>いひ</sup>負けつづけて死者たち

(二二九頁)

この歌は連作となつてゐるので、参考までに、その後の作品を引用したい。

灯をともし潤子のやうな小さなランプ 富澤赤黄男  
外とに出ればすでに夕暮れ戦場の赤黄男に小さき潤子のありき

死のそのとき眼鏡をかけてゐたらうか戦いくさに果てし伯父を想へば (二三〇頁)

兵送るため旗ありきいのちより高きところに掲揚されて (二三〇頁)

断崖に咲く夏椿散るときは両手を挙げて水に散るらむ (二二二頁)

亡き祖母の時計はめれば秒針は雪野をあゆむごとく動けり (二二二頁)

この連作のテーマは「戦争」である。新興俳句運動の代表である俳人、富澤赤黄男が日中戦争の地で長女潤子を詠んだ句を一首目の詞書に引用している。また富澤の俳句も「ランプ」と体言止めの手法を使つている点に注目したい。体言止めの俳句を詞書に利用することによって、イメージに広がりを持たせ、次の一首を豊かにしている。ここにも体言止めの効果を用いた作者の意図が認められる。この歌では先にあげた「社会詠」の一首と同様に「夕日」「沈む」と詠まれている。また特に着目したいのが、上の句で「夏」と体言止めの手法を取つてゐること、そしてそのあとに一マス空けてゐる点

である。これには栗木の意図があるのだろう。そして下の句でも「死者たち」と体言止めで終えてゐる点だ。これら二つの体言止めは、重層的な表現効果を持つてゐると言えよう。この一首の考察はこれのみにとどまるものではない。すなわち、栗木にとって「夏」とは「戦争」（終戦）を象徴してゐるのである。ここにおける「沈む」と「負ける」は同値表現で、負け戦だとわかつてゐるのに戦わざるをえなかつた死者たちの無念、無言が表現されている。「死者たち」は何も言わない、言えないのである。だが、読者はその「死者たち」から戦争の意味を問い、死者たちの無念さを感じ取るのだ。「死者たち」と体言止めの手法を取ることによる大きな効果であるだろう。このように作者にとつて「夜」を象徴する言葉（夕日が森に沈む）を作品に使うことは、本歌集のタイトルである『夏のうしろ』との深い関連性があるといえるのではないだろうか。

### 三、戦争詠にみる体言止め

次に戦争にみる体言止めについて考察したい。はじめに「白」を象徴する体言止めの歌を挙げ、そこに認められる特徴に着目したい。ちなみに引用の波線は白をイメージさせる表現の意味、傍線は体言止めを表す。尚、白のイメージを含んだ歌もある。

「カルピスが薄い」といつも汗拭きつつ父が怒りし山荘の夏 (九頁)

木蓮の白き花びらひらききり護符現はるるとききゆふくれ

(三六頁)

白百合の平熱は二十度ほどならむ雨の匂ひの風吹くゆふべ

(三六頁)

わが骨盤見る日はつひになからむを庭に真白く暮れのこる椅子

(四八頁)

午後二時にあぢさみの葉の上で逢ふ約束いとしくチベニマイマイ

(五二頁)

黒板の文字消す背に葉洩れ日のゆれば遠しとほし青春

(五二頁)

戦争の来るまへ少女期の母が「花物語」に読みし月見草

(五六頁)

悲しみは真白く雲に刻まれて氷塊のごとしマンハッタンの雲

(六四頁)

ブルックリンへ急ぐか従軍看護婦の帽子に似たる筒型の雲

(六四頁)

霜柱のやうな小部屋の並びあてハモニカはつんつんさびしき楽器

(七七頁)

れんこんの穴は十と数へ了へ食めば殺戮ある世はいづこ

(九二頁)

山茶花よ焚火しながら壮き日の父が読みぬし吉川英治

(二二七頁)

とりどりの面売る店の前を過ぎいよつやめく夜桜の白

(二二二頁)

ひいやりと人間の言葉をのせて咲くやうで気疎し夜の白萩

(一四〇頁)

豊かさのシンボルとして眼鏡ある国をおもへり夕雲のむかう

(一四九頁)

以上一五首(二〇、五%)が「白」を象徴とする体言止めの歌である。ここでもやはり「戦争」を詠んだ歌が含まれており、栗木作品を論ずる上で看過できない詠草となつておる。それは次の歌である。

戦争の来るまへ少女期の母が「花物語」に読みし月見草

(五六頁)

悲しみは真白く雲に刻まれて氷塊のごとしマンハッタンの雲

(六四頁)

ブルックリンへ急ぐか従軍看護婦の帽子に似たる筒型の雲

(六四頁)

れんこんの穴は十と数へ了へ食めば殺戮ある世はいづこ

(九二頁)

一首目は兄弟を亡くした栗木の母と戦争について詠んでいる。『花物語』は吉屋信子の代表的な少女小説であり、大正から昭和初期の時代に絶大な人気を誇つた短編集である。栗木の母も「女学生バイブル」と呼ばれた本を愛読したのであろう。だが、それは戦争が始まるまでのことだと詠んでいる。なぜなら、母の兄弟である栗

木の伯父はその戦争で亡くなり、祖母は息子を亡くしたのだ。次の二、三首目に詠まれている「マンハッタン」「ブルックリン」はアメリカの地名であり、ここでは二〇〇一年九月十一日に起きたニューヨークの同時多発テロのことを表現している。これらの歌は「前に出ず」という小題に収められており、収載歌数は二三首である。一首目は次の歌で始まる。

わき腹を白く光らせいちまいの紙舞ふ…と見えて飛行機の燃ゆ  
(五九頁)

この歌は同時多発テロが起きたニューヨークの様子を詠んだものである。テロに使われた飛行機が白い紙のように舞い、燃えおちていった様子が想像できる。ここで着目したいのが「白く」「紙」「飛行機」と、やはり「白」をイメージさせる言葉である。なぜ「白」なのだろうか。この点については後に述べたい。このように一首目からアメリカのテロについて詠んでいる連作なのだが、十二首目からは突如、日本関連についての歌に変化している。それらの歌を次に挙げたい。

「Show the flag」声迫られて日本は影法師のみまた差し出すか  
(六三頁)

後方支援どこまでが前か後ろかとみづからの尾を追ひつつ廻る  
(六三頁)

玉音を理解せし者前に出よ 渡邊白泉

前に出よと言はれて罪をみとめたる少女のわれを包みし 蜩  
(六三頁)

前に出ず 歴史も法も宗教も戦も知らず立ちつくすのみ  
(六四頁)

引用した四首が収められている小題「前に出ず」の由来は、これらの歌に認められる「前」と「後ろ」からだろう。先の富澤赤黄男の句のように、ここでも栗木は俳人である渡邊白泉の句を詞書として活用している。また「前に出よ」と自歌でも詠んでいる点は興味深い。富澤の句では「赤、黄色」をイメージさせたが、ここでは渡邊白泉の名前の「白」も「白」という色彩をイメージさせるのではないだろうか。そして、これら四首のあとで栗木はまた再びアメリカのテロの詠草を配列している。それが先に挙げた「マンハッタン」「ブルックリン」の歌である。だが、さらに次の歌で栗木の視点は日本へと戻っている。それが次の一首である。

ショーケースに白き布かけ灯を消せば繙帯の兵士ねむれるごとし  
(六五頁)

この一首については栗木が後に、本歌集の歌を作っている時期に俳句を読みながら着想のひらめきを得ていたこと、歌集に収めるときに発想の源になった俳句を詞書に書き添えたことを述べている。例えば、この歌には詞書はないが、渡邊白泉の句「繙帯を巻かれ巨

大な兵となる」を基にしていることも述べている。また次のようにも述べているので引用したい。

子供の頃、駅や神社などで傷痍軍人の人たちが金銭を乞う姿を見るとむしように怖かった。あの白い繻帯、白い病衣、白い義肢義足（実際は白くなかったと思うが私には真白に見えた）が怖かったのだ。繻帯の兵士を街で見かけることはもうないが、兵士たちの無念は今でもこの世に息づいている。

以上論じてきたように、栗木は現在のアメリカのテロについて詠んでいるようだが、実は自身がいる日本と、過去の日本が関わった戦争に引き寄せて詠んでいるのだ。そしてその戦争に対する想いの象徴が「白」だったのであり、それが本歌集に「白」が詠まれた理由ではないか。最後に、この小題の末尾の歌についても考察したい。

名月がうすく汗ばむ夜に読めり仕返しやめぬうさぎのころ  
カチカチ山  
(一六六頁)

この歌で着目したいのが「名月」「夜」という「白」「夜」を象徴させる言葉、そして「うさぎ」と、「白」を象徴させる言葉が歌に詠まれている点である。上の句では「白」という栗木の中の「戦争」を象徴とさせるもの、そして下の句では「うさぎのころ」と体言で止めている歌である。では、体言止めの「うさぎのころ」

とは何だろうか。有名な昔話である「カチカチ山」では、優しいおばあさんをだまして殺してしまった狸を、うさぎが「仇をとる」(「狸を殺す」)ことで終わる。昔話では恩返しという美談で終わる話だが、では「うさぎのころ」は本当はどうだったのかは語られていない。「白いうさぎ」は正義のイメージなのだろうか。いや、実は栗木は日本の有名な昔話を当時の世界情勢に重ね合わせているのだ。世話になったおばあさんの「仇をとる」ことは、結局のところ「正義という名の報復」であり、「うさぎのころ」にあるものは「憎悪」だろう。そして、それは昔から、またテロ発生当時も現在も世界中で続いているものだ。栗木は詠んでいるのではないだろうか。さらに昔話の典故を示した詞書風のカチカチ山の「カチカチ」の表記は、緊迫した国際関係(戦火)(火種)をイメージさせる語句として注目される。このように「うさぎのころ」という体言止めやカチカチ山の表記を用いることで、豊かなイメージが生成された。以上のように、読者自身が想像力を働かせることができるが、この歌の体言止めの効果であろう。

### おわりに

栗木の第五歌集『夏のうしろ』のレトリック表現である体言止めの歌を挙げ分析と考察を行った。最後に整理し、まとめることとする。

冒頭に引用したことの繰り返しとなるが、体言止めの最大の働きは述語や述部を省略することから、感覚と想像力によって象徴性



を高め、余情を豊かにすることだ。この点についてまず整理したい。本歌集四五〇首のうち七三首（一六、三％）に体言止めが使われていることは先に述べた通りである。その体言止めの歌のキーワードとして「夜」「白」を象徴する歌を挙げ、歌の分析をした。その結果、本歌集にある「戦争」という大きなテーマがこれらのキーワードと密接に関係していることが判明した。特に「白」は栗木にとっては「戦争」の記憶であることがわかった。栗木は、幼いころに町で見た傷痍軍人たちの白い繻帯、病衣、義肢義足の「白」を鮮烈に覚えているのだろう。

では、体言止めを栗木が作品に使う効果はどこにあるのだろうか。それはやはり、本歌集の「戦争詠」と密接に関わりがあると言っているだろう。本歌集に収められている「戦争、紛争、テロ詠」は九八首（二一、七％）である。その特徴は、アメリカ、イラク等遠い土地での歌に、栗木がいる日本の姿を重ね合わせている点であろう。読者は遠い地でのことのように読んでいたのだが、いつのまにかそれは自身がいる日本の歌になっている。また現代のことではなく、いつのまにか過去への想いの記憶にもなっている。当然それらは偶然ではない。そこで重要なのが、体言止めの効果と働きだろう。栗木は結句に体言止めを使うことで、詳しくは語らず、読者の前に提示するだけだ。それは栗木自身が体言止めの働き、感覚と想像力とによって象徴性を高め、余情を豊かにすることを信じているからではないか。栗木の愛唱歌である「観覧車」の歌のように、解釈は読者の手に委ねられている。だから同じ歌でも、時代、状況、性別によって解釈が異なるのだろう。その重要な手法を栗木

はデビュー期から変わることなく重要視しているのだ。体言止めの栗木の歌を読んだ読者は、自身の感覚と想像力によって象徴性を高めることができる。また、作者である栗木自身も、体言止めの手法の持つ効果によって、時代や国も超えて自由に歌を詠めるのではないだろうか。それが栗木が体言止めを歌に使う意味ではないかという点を結論としたい。だが、本稿では字数の都合で割愛した点やさらなる分析、考察が必要な点がある。また、今後は栗木短歌におけるレトリック表現として、続けて分析と考察を行う予定である。それらを今後の課題としたい。

#### 【注】

- (1) 来嶋靖生『短歌の技法』平成一五年一月、飯塚書店）本書の一四四頁を引用者がまとめた。
- (2) 栗木京子「自歌解説 私の心に残る歌」『短歌』平成一七年四月、角川書店）一〇六頁。
- (3) 『短歌往来』（平成一五年一月、ながらみ書房）二四頁。
- (4) 注（3）に同じ。二四頁。
- (5) 栗木京子『夏のうしろ』（平成一五年七月、短歌研究社）一七七頁。
- (6) 昭和五二年の学習指導要領の改訂で導入された考え方である。偏差値重視の教育を廃止しゆとりのある教育への転換を行い、生きる力を育成しようとする趣旨のもと実施された。週5日授業、三割程度の授業数の削減、総合的な学習の時間導入が実施された。平成一一年全面改正、平成一四年から実施とされている。

る。平成二〇年三月、学習指導要領の改正により「ゆとり教育」転換がはかられた。

(7)注(2)に同じ。一一二頁。